

依頼会話の展開パターンに関する日中対照研究

張 穎

要 旨

本研究は日本語と中国語の依頼会話の好ましい展開パターンを明らかにすることを目的とし、依頼者と被依頼者の相互行為の観点から依頼会話を分析したものである。その結果、「予告」の発話は両言語において現れやすい場面とそうではない場面がある。また、日本語会話は「情報提供型先行発話→依頼」という展開であるのに対し、中国語会話は「情報要求型先行発話→依頼」の展開になっていることが分かった。日本語の場合、依頼者は依頼に関する情報を提供することによって、被依頼者が自ら依頼を申し出ることを期待し、それによって明示的な依頼を避けたいという動機によるものである。一方、中国語は相手に依頼遂行の能力があるかどうかを確認することによって、依頼を行うかどうかを決めるという動機によるものと考えられる。更に、日本語会話は依頼者と被依頼者が距離を保ったまま会話を進められているのに対し、中国語会話から被依頼者が積極的に依頼者の心理的負担を軽減させようという動きが見られた。

【キーワード】 依頼の展開パターン、予告、先行発話、依頼

1. はじめに

社会と文化が違えば、それぞれ持つ好ましい会話の展開パターンも当然異なっている。この「好ましい会話の展開パターン」に対する認識のすれ違いがコミュニケーションの障害を引き起こす一因であると既に先行研究によって明らかになっている。先行研究の多くは接触場面に現れたミスコミュニケーションに注目して、「問題分析アプローチ」（ネウストプニー1995）という手法で母語話者と非母語話者がそれぞれ持っているその文化特有のルールを分析し、様々な知見を得た。

しかし、母語話者と非母語話者がお互いの「好ましい会話の展開パターン」を予め認識していれば、接触場面でのミスコミュニケーションは改善されるものと考えられる。例えば、「依頼」という言語行動について、中国人のストレートで唐突な発言に戸惑いを感じた日本人の経験談と、日本人の回りくどい話し方にいらいらしている中国人の体験談をよく耳にする。しかし、母語話者にとってそれぞれはごく自然な言い方で、不都合なところは何かとつない。こうした文化の違いから生まれた「ずれ」はお互いの「好ましい会話の展開パターン」を知ることによってある程度の解決を得られるのではないかと考えられる。したがって、ミス

コミュニケーションを未然に防ぐために、「問題分析アプローチ」のほかに対照言語学の手法を取り入れ、文化の違いによるずれを明らかにする必要がある。

日常生活の中で頻繁に行われている依頼という言葉行動が人間関係にダメージを与えやすいため、依頼者と被依頼者は自分の発話に細心の注意を払っている。日本語と中国語の依頼の発話を分析することによって、社会と文化による相違を浮き彫りすることができると考える。そこで、本研究は依頼の言行行動を取り上げ、日本語と中国語の依頼会話の好ましい展開パターンがどういったものなのか、その違いを明らかにすると共に、その原因を探ることを目的としたい。

2. 先行研究

依頼に関する研究は今まで既にたくさんなされてきたが、その多くは依頼表現に注目し、相手との関係や場面の種類によって、依頼表現がどう変わるのか、丁寧さの観点から分析したものが多かった（馬場他 1992, 浜田 1995,）。しかし、形態的、語彙レベルの研究だけで取り扱いきれない依頼表現の存在が気付かれ、井出（1982）、熊取谷（1995）などが発話行為としての依頼から談話行

動としての依頼への視点移動の必然性を指摘した。そうした流れの中で、依頼の会話構造や依頼の前置きなどに関心をもつ研究が増えてきた（柏崎 1992, 巖 1999 など）。しかし、上に挙げられた研究は主に話し手の言語行動を中心になされてきたもので、如何なる会話も話し手と聞き手の相互作用によって成り立つものであるという大前提に立って考えれば、話し手の言語行動だけに注目して、「依頼」の会話展開を見るのは不十分である。

こうした中、依頼者と被依頼者の言語行動に注目して、依頼の接触場面の問題点を分析したのは猪崎（2000）の研究である。猪崎（2000）は日本人とフランス人日本語学習者の「依頼」会話の中の社会・文化的な相違が原因と見られる逸脱と不適切さについて考察を行った。比較のため、フランス語母語話者と日本語母語話者の会話をも用いた。その結果、日本人の依頼談話展開メカニズムが「依頼の予告」から「依頼」へと進み、中に「先行発話」が時々入る。それに対して、フランス語は「先行発話」のみを提示し、「依頼」を直接提示しないという。更に日本人の先行発話は「情報提供」型で、フランス人が「情報要求」型であると指摘した。本研究は猪崎（2000）から大きな教示をいただいた。しかし、猪崎（2000）は主に接触場面におけるフランス人日本語学習者の不適切な発話について分析したものである。母語同士の依頼会話に関しては、データ数が少ない（三場面各々三組）こともあり、会話の展開パタンの抽出に留まり、依頼者と被依頼者がどのように働きかけ合い、依頼の会話展開パターンを作り上げているのかについて触れていなかった。

以上の先行研究を踏まえて、依頼者のみならず、被依頼者の言語行動にも注目し、依頼者と被依頼者がどのように働きかけあっているのか、またその働きかけによって、日本語会話と中国語会話それぞれのどのような「好ましい依頼会話の展開パターン」が生まれるのかを明らかにしたい。それぞれの違いを提示することは、日本語母語話者と中国語母語話者の間に現れかねないミスコミュニケーションを防ぐことに繋がると考えられる。

3. 分析の対象

3.1 協力者：

20 代、30 代の日本人と中国人の若者それぞれ 48

人を対象にロールプレイを実施した。内男性 22 人、女性 26 人である。会話相手の性別は会話に影響を与える可能性があると考え、今回のロールプレイはすべて同性同士で行った。協力者は大学院生と会社員が殆どであった。

3.2 場面設定

依頼の言語行動が相手との関係、負担の重さなど各種の要素によって左右されており、自然会話ならこれらの要素を全て統制するのが不可能に近いため、今回はロールプレイの方式を採用した。二つのロールプレイを設定した：

場面① 親しい友達に五千円を貸してもらうように頼む。

場面② 親しい友達に自分の代わりにアルバイトに行ってもらうように頼む。

この二つの場面を設定したのは以下の理由からである。お金の貸し借りと代わりにバイトに行ってもらうというこの二つの依頼が相手にかける負担が重いため、複雑な会話の展開が予測される。また、この二つの場面は日常の中で、親しい間柄に起こり得る場面でもある。更に、会話の展開が場面から影響を受けているのかどうかを見るために、二つの場面を設定することにした。

ここでいう親しい友達とは、年齢、身分において大きい差がなく、よく顔を交わす程度の人を指す。データ収集の際、できるだけ実際の会話に近づけるように、インフォメーションギャップの方法でロールプレイカードを作成し、それぞれ置かれている状況を説明した。手順としては、協力者に予め親しい友達と一緒に来るようにと指示し、ロールプレイのペアを組んだ。場面①の録音が済んだ後、依頼者と被依頼者の役割を交換して場面②の録音を行った。

全ての発話を音声テープに収録して、文字化し、分析のデータとした。本研究の分析対象となったデータは、国別（2）×場面（2）×20 ペア＝80 組のデータである。また、文字化されたデータでは、J は日本人、C は中国人を表し、M は男性、F は女性であることを意味する。

4. 分析の枠組み

猪崎（2000）は話段を分析単位にし、依頼談話の話段は基本的に、〈依頼予告〉〈先行発話〉〈先行発話応答話段〉〈依頼〉〈依頼応答〉〈依頼者または被依頼者の結論〉によって構成されていると述べて

いる。また、三井（1997）は依頼先行発話に「前置き、情報要求、事情説明」などの先行発話が観察された」と指摘し、その定義から見れば、三井（1997）が言っている前置きは猪崎（2000）で言われている〈依頼予告〉に相当するものである。それぞれの言い方は違うが、依頼会話は〈依頼予告〉〈先行発話〉〈依頼〉〈依頼の交渉〉というように展開していくということに共通認識がある。本研究も依頼会話は以上の流れによって展開されていくものという立場を取る。〈依頼の交渉〉について別紙で論じたいと思うが、本研究では主に〈依頼〉までの会話について分析する。また、分析の際、話段などの分析単位に頼らず、依頼者と被依頼者の間に現れた働きかけとそれに対する反応を見ることによって、相互の働きかけを分析していきたい。

以下に本研究の中の〈依頼予告〉〈先行発話〉〈依頼〉の定義を提示する。〈依頼予告〉とは「ちょっとお願いがあるんですけど」など依頼を明示的に示唆するメタ的な発話である。「先行発話」について、Levinson（1983）は、「単にある種の発話の前に来る別の種類の発話というのではない」、「たいていの場合、その後に来る特定の種類の行動をほめかすように作られている」と述べた。本研究はこの定義に従い、依頼に入る前の準備段階の発話を〈先行発話〉と見なす。また、直接発話による依頼を「依頼」と見なす。

5. 結果と考察

5.1 〈依頼予告〉について

日本語と中国語会話に現れた〈依頼予告〉の個数（日：12 中：9）にそれほど差はなく、場面による違い差異は両言語の会話ともに見られた。（お金の依頼：日本 11 中 7、バイトの依頼：日本 1 中国 2）つまり、予告の表れやすい依頼の場面とそうではない場面があり、必ずしも現れるものではない。

三井（1997）では、こういった「依頼を行う」という言語行動について言及するメタ言語的な発話は、会話の方向性を示唆するもので、依頼の具体的な内容についての情報を与えていないため、被依頼者の心理的負担を軽減させることにおいて有効であると述べた。しかし、今回の会話データからそういった効果を見られず、かえってそれと逆の現象が観察された。

【会話 1】

- 1CF20 我想拜托你一件事（お願いしたいことがあります）
2CF19 什么事？ 跟我还客气
（何ですか？ 私にこんなに遠慮する必要はないでしょ）

この会話の中に、CF20 は中国語の中で丁寧度の高い「我想拜托你一件事」（お願いしたいことがあります）を使用し、依頼があることを予告したが、CF19 はこの言い方によそよそしさを感じ、「跟我还客气」（私にこんなに遠慮する必要はないでしょ）と応答した。ほかに、これと似た「没事」（大丈夫よ）「别客气」（遠慮しないで）「说吧，啥事」（言ってごらん、どういうこと？）など相手を慰めたり、相手の発話を促したりすることによって、依頼者の心理的な負担を軽減させようとする発話もあった。中国語会話では、このような改まった言い方に対して、被依頼者が気を使われていると感じる場合が多く、親しい友人の中では距離を感じさせる発話であることがこの会話から分かる。そのため、〈依頼予告〉の中に「我想问你一件事」（ちょっと聞きたいことがある）という、依頼をはっきり予告しない曖昧な言い方がよく見られた。これに対し、日本語会話の中で、〈依頼予告〉の発話に対して、被依頼者は「何かな」「何ですか」など中立的な応答が多く、相手との距離を保ったままで話が進められている。

5.2 〈依頼の先行発話〉

本研究の中で〈依頼の先行発話〉にあたるものから、依頼側がこれから行う依頼に関する情報を提供する発話（会話 2）、相手が持っている情報を確認する発話（会話 3）、被依頼者の情報を聞き出す（会話 4）など、三種類の先行発話が見られた。それぞれ、【情報提供型】【情報確認型】【情報要求型】と名づけた。

【会話 2】

- 1JF39 私は実はね、まだバイトを続けているのね？
2JF40 何のバイト？
3JF39 ベビーシーターです。
4JF39 すごく楽しいんだけど。
5JF40 うん
6JF40 でも来週実家に帰るからいけなくなったから、
7JF40 代わりに行ってくれない？

ここで JF39 は JF40 にとって未知の情報（実はまだバイトを続けていること）を提供している。この後、「でも来週実家に帰るからいけなくなったから、代わりに行ってくれない？」と依頼を切り出した。このように、依頼と直接関係していないように見える発話をすることによって、双方の情報が共有され、依頼の前触れとなる先行発話は【情報提供型】として分類する。

【会話 3】

- 1JF29 あね？／／すぐその本屋でね？
2JF30 うん
3JF29 第二言語習得のね？本、この間〇〇先生が言っていたやつ見つけたんだけど
4JF30 うん
5JF29 あれ、すごい高いって知ってた？
6JF30 やーちょっとよく覚えていないけど
7JF29 実は今持っているお金が足りないから、貸してほしい。

この会話では、JF29 は「第二言語習得のね？本、この間〇〇先生が言っていたやつ見つけたんだけど」という双方が共有している話題を持ち出し、「あれ、すごい高いって知ってた？」を発話することによって相手が持っている情報を確認している。ここで行われた確認という手続きは「その後に来る特定の種類の行動をほのめかす」(Levison1983)の機能を働いている。この後、「実は今持っているお金が足りないから、」と依頼の話段に移った。このタイプの先行発話を【情報確認型】先行発話と分類する。

【会話 4】

- 1CF19 哎，你最近挺忙的吧？（最近忙しいよね）
2CF20 嗯，（まあ）
3CF19 下星期有时间吗？（来週時間ある？）
4CF20 有什么事啊？（何かあるの？）

これは CF19 と CF20 による会話である。CF19 から一見近況を尋ねているように見えるが、実は CF20 が彼女の言わんとすることを見抜き、「何かあるの」と応答し、依頼のための先行発話として受け止め、その詳細を要求している。このような相手の能力や都合を伺う先行発話を【情報要求型】先行発話と分類する。

〈先行発話〉に関して、日本語の依頼会話で多く見られたのは〈情報提供型先行発話〉であり、中国語の場合は、〈情報要求先行発話〉である。〈情報確認型先行発話〉は両言語にも少なかった。つまり、日本語の依頼会話は【情報提供】先行型であるのに対し、中国語の依頼会話は【情報要求】先行型である。この点について更に詳しく見てみたい。

Levison (1983) は依頼の先行語句の特徴を「拒否に対する最もありそうな根拠を確かめるのである」とし、その動機は「好ましくない応答（拒否）をもたらすような行動（依頼）を避けることである」と述べた。相手の能力が依頼を拒否する理由になる可能性が大きいため、相手の能力についての問いは依頼先行発話で最も好ましいものであると結論づけた。Levison は情報要求の発話のみを先行発話として扱い、最も好ましい依頼の先行連鎖を順番付けた。本研究で扱った先行発話はいっと複雑なものなので、その結論をそのまま使用することができないが、先行発話を使用する動機についての考えを応用することができる。

【会話 5】

- 1CM06 那下个星期你有事吗？有什么其他安排。
（あの来週用事ある？何かほかの予定が入ってるの？）
2CM06 下星期，下个星期三。
（下週，来週水曜日。）
3CM05 下星期三一，下星期一，三下午学校好象有课。
（来週の水曜日，来週一水曜日学校にゼミがある。）
4CM06 下星期三下午是吧，
（来週水曜日の午後なの？）
5CM06 能请假吗？
（休める？）
6CM05 上课我哪能，可能不行。
（ゼミだから，多分休めない。）
→7CM06 没什么，本来想你没事的话想叫你替我打天工。
（別に何も無いよ。もし用事がなかったら，かわりにバイトに入ってもらいたいんだ。）
8CM05 下次有机会再说吧。
（今度にしよう。）

【会話 5】の中で、CM6 は自らの依頼を拒否される理由となりうる相手の都合について三回にもわ

たって質問を繰り返したが、望ましい返事は返ってこなかった。相手に自分の依頼を受諾してくれる可能性はないことを受け入れ、依頼することをあきらめた。CM06 の「短焚担」(何もないよ)の発話によって自らの依頼を取り消した。これはまさに、Levison (1983) で述べられた先行発話の動機「好ましくない応答(拒否)をもたらすような行動(依頼)を避けることである」の現れである。当然、相手に自分の依頼を受け入れる能力があることを確認できれば、「先行発話」の後に「依頼」へと移る。

しかし、好ましい先行連鎖かどうかは文化によって非常に異なると Levison(1983)に指摘されているように、好ましい展開パターンも文化によって非常に異なっている。「依頼の先行語句を使用する動機は好ましくない応答(拒否)をもたらすような行動(依頼)を避けることである」という考えが全ての言語に成立するならば、日本語に最も多く見られた【情報提供型】先行発話の使用をどのように説明するのだろうか。

【会話6】

- 1JF14 **さん,
2JF14 実は、私はいまアルバイトしてるんだけれども、
3JF14 あの一、ちょっと、どうしても忙しくて、
4JF14 明日一日だけ行くことができないのね？
5JF14 で、代わりの人がいないと、どうしても困る。
6JF13 家庭教師？
7JF14 んー、そう、
8JF13 私でよければ、
9JF13 何時から、

この会話の中で JF14 は自分が今バイトしていること、明日行けないこと、更に困っていることを説明している。しかも、ここで「これはあなたに対するお願いですよ」という明確な発話をしておらず、ただ自分が困っているよということをアピールするだけで、被依頼者 JF13 は JF14 の意図を察知し、「私でよければ」と自ら依頼の受諾を申し出た。自分が困っているという依頼に関する周辺的な情報を提供することによって、相手に自ら申し出てもらいたいと期待している。相手が依頼者のこの期待を認識し、自分に受け入れる能力があると判断すれば、

受諾するが、能力がない場合、それを断る。これによって、依頼者は「好ましくない応答(拒否)をもたらす行動(依頼)を避ける」ことができる。つまり、被依頼者が自ら依頼を申し出ることによって、依頼者は明示的に依頼しなくて済む。そのため、日本語母語話者のデータから観察された〈依頼〉の発話は 13 個しかなかった。このような会話の展開は中国語会話にまったく見られなかった。

【情報要求】先行型の展開パターンは日本語会話にも見られたが、このタイプの先行発話の前に「突然ですが」「本当に申し訳ないんですが」などの「注釈的発話」(杉戸 1990)が多く使用されている。「注釈的発話」の機能の一つは「人間関係を調整するため」(杉戸 1990)である。ここで「注釈的発話」を使用することによって、突然相手から何かを聞き出すことによって相手にもたらし唐突感を解消しようという意図を窺えた。更に、被依頼者が【情報要求】型先行発話を受けた後、なぜそういう情報を知りたいのか、その理由を聞き出すための発話が多く見られた。つまり、依頼をする際、理由を述べるのが日本語会話では不可欠な行為であり、理由を述べる発話の欠落が許されていない。この点からみても、【情報提供型】先行発話は日本語会話では好ましい展開パターンであると分かる。これに対し、中国語会話ではこの点において寛容である。これは中国人の言語行動が相手との親疎によって決められていることに起因していると考えられる(山口 1997)。お金の依頼の場面にこの現象が特に目立っている。

6. おわりに

以上、本研究は日本語と中国語会話の「依頼」に至るまでの発話を中心的に分析し、以下のことを指摘することができると思う。まず、日本語と中国語の依頼会話の好ましい展開パターンはそれぞれ、「情報提供型先行発話」→「依頼」と「情報要求型先行発話」→「依頼」であると言える。更に、場面によって「予告」が先行するが、中国語の会話において、「予告」が相手に距離を感じさせるものであると分かった。中国語の場合、被依頼者は積極的に相手との距離を縮めようとしているのに対し、日本語の場合、相手との距離を保ったままに会話が進められている。

「先行発話」に関して、中国語会話では被依頼

者に情報を要求する先行発話が多く使用しており、この点は猪崎（2000）で論じられたフランス語の場合と同じであり、Levison（1983）が指摘した英語の場合とも似ている。このことについて、猪崎（2000）は、「〈先行発話〉の「情報要求」型の発話で間接的、暗示的に依頼を示し、被依頼者がそれを推測して、承諾や申し出を行うことを期待している」と説明している。しかし、本研究が対象とした中国語会話では、猪崎の説明に反して、依頼の明示的発話が現れた。中国語の場合の「情報要求型先行発話」は、相手に依頼を遂行する能力があるかどうかを確かめることによって依頼を行うかどうかを決めるために行われていると言えるのではなからうか。この点については、意識調査などを通して今後明らかにしていきたい。一方、日本人は情報を提供することによって、被依頼者に自ら申し出たり、依頼を受諾したりしてほしいという期待から「情報提供型先行発話」を好んでいると言えよう。被依頼者は明確に依頼されなくても、依頼者の情報提供の発話を聞くだけで、それに敏感に反応し、自ら依頼を申し出ている。

本研究は依頼に至るまでの過程を分析し、日本語母語話者と中国語母語話者にそれぞれ好ましい展開パターンがあることを明らかにすることができた。こういった好ましい会話の展開パターンに現れたずれは日本語話者と中国語話者の接触場面でのずれを引き起こす一因であると考えられる。この違いを日本語と中国語母語話者に提示することによって、より良い異文化コミュニケーションへ一歩近づいたと言えよう。

今後、依頼を行った後の交渉の過程をストラテジーの角度、つまり「依頼を達成するための依頼者ストラテジー」と「依頼を交渉するための被依頼者

ストラテジー」という角度から明らかにしていきたい。

参考文献

- Levison Stephen.C (1983) Pragmatics. Cambridge:Cambridge university Press スティーブン・レビンソン 1990 『英語語用論』（研究者）、安井稔・奥田夏子訳
ザトラウスキー・ポリ（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』 くろしお出版
ネウストプニー.J.V（1995）『新しい日本語教育のために』大修館
猪崎保子（2000）「依頼」会話に見られる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ—日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究『日本語教育』104号 日本語教育学会
井出祥子（1982）「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 文化と社会 第5巻』大修館
厳廷美（1999）「発話機能からみた日本語と韓国語の依頼の構造とストラテジー—談話完成テストの結果から」社会言語科学会第4回研究大会 予稿集
柏崎秀子（1992）「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79号 日本語教育学会
熊取谷哲夫（1995）「発話行為理論から見た依頼表現—発話行為から談話行動へ—」『日本語学』14—11 明治書院
浜田麻里（1995）「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略」『日本語学』14—11 明治書院
馬場俊臣・盧春蓮（1992）「日中依頼表現の比較対照」『北海道教育大学紀要』第1部A 第43巻1号
三井久美子（1997）「日本語・日本文化研究」大阪外国語大学
山口和代（1997）「コミュニケーション・スタイルと社会的文化的要因—中国人及び台湾人留学生を対象として—」『日本語教育』93号 日本語教育学会

ちょう えい／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
yingzhang47@yahoo.co.jp

A Contrastive Analysis of the conversation style

— In the Case of the Request Conversation in Japanese and Chinese —

ZHANG Ying

Abstract

This research explored the conversation patterns of a request in both Japanese and Chinese, and analyzed the mutual behavior from the point of view of both the requester and one receiving the request. The result was that a “warning utterance” tends to appear in both Japanese and Chinese conversation in some situations. It was also found that Japanese conversation could be categorized as “provide the information first and then request” type, while Chinese conversation was “request the information and if other person can do it then request” type. In the case of Japanese, the requester only provides information about the request, and expects the other person to offer their help whereby the requester can avoid making a direct request. On the other hand, it appears that Chinese first ask if the other person has ability to accomplish the request, and then decide whether they should make a request. Moreover, it was found that Japanese conversation evolves by keeping a separation between the requester and other person, while in Chinese conversation the requester actively tries to lessen the mental burden or stress the other person might shoulder.

【Keywords】 conversation patterns of a request, warning utterance, pre-sequence, request

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)